秋田 遠景近景
日銀秋田支店長コラム

クマ出没の影響

本県の評判低下を懸念

読者の方々も飽き飽きしているのではと危惧するが、ツキノワグマを巡る足元の状況を本県の生活者視点から改めて整理しておくことには意味があるだろう。

11月末現在、過去最悪だった2023年度に迫るペースで人身被害が発生しており、県内全域で日常生活が脅かされる事態となっている。秋田市街地でも、代表的な観光地である千秋公園で目撃されたことから立ち入りが制限され、筆者の職場近くでもクマが走り回る姿が防犯カメラに写っていたこともある。

通勤や通学のみならず、ジョギングや散歩、買い物での外出に至るまで、都度クマダスの確認を怠らず、クマへの恐怖を身近に感じながら過ごしている毎日だ。こうした中、昼夜を問わず対応に当たってくださっている官民の皆さまには本当に感謝したい。

言うまでもなく、このような事態は本県経済はじめ、さまざまな面に悪影響を与えている。クマ被害の多発は、被害に遭われた方々の心身をひどく傷つけるだけでなく、医療資源の逼迫にもつながりかねない。また、県外客からの宿泊キャンセルや各種イベントの中止も増え、繁華街の人通りも減るなど、観光業やサービス業を中心に弊害が出ている。紅葉の季節に合わせて寄港したクルーズ船の乗客が所在なげにホテルのロビーで時間をつぶしているのを目撃し、非常にやるせない気持ちを抱いた。

クマの冬ごもりの時期を迎えれば、市街地出没の数も減り、経済へのダメージはある程度緩和されるだろう。秋田の冬は大変だよ、と周囲から言われて赴任した身にとって、降雪は厳しい冬の訪れを告げる象徴的な出来事ながら、一方で雪を待ちわびる事態になっている。それだけ、身近な安全に神経質になっている証しだ。

心配なのは、これほど全国的に注目を集めることによる本県への中長期的かつ潜在的な悪影響である。鈴木健太知事が指摘した「フェーズが変わった」には、クマ被害が段違いに増加しただけでなく、本県に対する評判リスクの高まりも含まれるだろう。

人口の社会減に対応すべくAターンを推進する本県にとって、とくに子どもたちの安全性が心配される事態は、移住を検討する家族の意識に暗い影響を与えかねない。また、企業誘致においても、従業員の安全確保のハードルが上がることで、クマ被害の少ない他県への進出に踏み切る先も出てこないとは限らない。

わらび座のミュージカル「秋田は何もない」での冒頭の歌詞「人は減るけどクマは出る」は、自虐的な中にもユーモアを感じさせるセリフだったが、事態の深刻化とともに笑えない状況に陥っている。

わが国全体が人口減少に悩まされている中で、皮肉ながら、日本ほどクマが市街地に出没している国も珍しい。このところ、ルーマニアやカナダでも、クマによる悲惨な人身被害が報告されているが、わが国とは件数が桁違いに少ないのが現状だ。

出没増加の背景として、クマの主食であるブナやミズナラの凶作といった短期的要因のみならず、人口減少や里山の荒廃、ニホンジカやカモシカの増加による山での食料奪い合い、といった構造的要因を指摘する声も聞く。いずれも一朝一夕に対処できるものではなく、個人の力が及ぶ範囲を超えていることが、対処の難しさを物語る。

それでも、すでに県や各市町村が取り組んでいるように、市街地に出没したクマは駆除を目指して人とのすみ分けを徹底し、住民の安全・安心を取り戻した上で長期的な共存を志向するしか方法がないように思われる。

11月中旬から、本県はふるさと納税を通じ支援を呼びかけている。県在住者も支援できる特徴があり、私も早速参加した。開始2週間ほどで目標金額の4割に達し、全国からの寄付金が続々と集まっているのは心強い限りだ。

本県生活者の一人として、クマの封じ込めに成功し、人々の安全が一日も早く確保されることを強く願っている。その後、コロナ禍を参考に、正しい情報の発信によって、本県の評判回復に微力ながら尽くしたいと考えている。

（種村知樹・日本銀行秋田支店長）

〈随時掲載〉